

王国

王国

久野那美

遠い、海の果てに。

世の中の人達からついいうっかり忘れられた小さな王国がありました。世の中のひとたちは、普段は、王国のことなどすっかり忘れていて、自分のことや自分以外のもののことを考えたり考えなかったりしているのですが、時々、ふとしたはずみに、

「そういえば。そんな王国があったっけ。」と、思い出すのでした。思い出すと、なんだか幸せな気持ちになりました。

幸せな気持ちになると、いろんなことに挑戦してみたくまりました。なので、どんどん忙しくなりました。

いつのまにか、王国のことは忘れてしまっているのです。

そういうわけで、

王国のことを誰もが知っていましたが、王国については誰も知りませんでした。さて。

誰も知らないことを調べるのが学者の仕事です。

王国のことを研究する学者は世界中に大勢いました。

王国のことを考えていると、どんどんやる気が出てくるのです。

やる気になると、いろんなアイデアが湧いてきて、いろんなテーマに取り組みたくなりました。

そうこうしているうちに、いつの間にか王国のことは忘れてしまっていました。

そういうわけで。

世界中のどの文献を調べても、王国のことは何もわかりません。

短い期間で歴史に名を残した王国がたくさんあるというのに、あったかどうかもはっきりしないまま物語や伝説になっていく王国がたくさんあるというのに、この王国のことはどこにも記録がないのです。

これはもう、だれの所為でもなく、そういう王国なのだ、ということなのでした。そして、これは、そういう王国のお話です。

ここに一人の若い学者がおりました。若い、生意気な学者……の卵でした。古今東西どこで書かれたどの文献を読んでも、満足することはありませんでした。それらには総じて、「何か」が欠けていたのです。

彼は謙虚ではありませんが熱心な学者でしたので、毎日一生懸命勉強しました。学者といても卵ですので、研究だけで生活することはできません。師匠の助手をしながら、いろいろなアルバイトで生活費を稼ぐ毎日なのでした。

「何か」が欠けている師匠の研究を手伝うのは苦痛でした。そう思っている彼の態度を師匠が快く思うはずもなく、人間関係はぎくしゃくしていました。たとえばこんな感じですよ。

「君、駄目ですよ。これ。」

「どうしてですか？」

「君にはまだまだ学問というものが分かっていないわけですからね。」

「わけなんですか？」

「そうですね。だから駄目なんです。やり直しておくように。」

「どの辺をやり直せばいいでしょうか。」

「全部ですよ。」

「どうして全部なんですか？」

「口答えはいけませんね。」

「何も答えてません。質問しているんです。」

「そう。まだ答を出すには早い。それには勉強が必要です。期待していますよ。」

「……期待されているんですか？」

「そうですね。だから厳しくするのです。」

「だから？」

「若い人はあまやかすと駄目になりますからね。」

「……。」

師匠や先輩の学者たちの言うことは、いつも彼を混乱させました。「何か」が微妙に間違っている気がするのです。「何か」大切なものが欠けているように思えるのです。けれども、それならそれは何なのかと聞かれても、彼には答えられないのでした。それが備われば何がどう完成するのかわかれても、やっぱりよく分からないのでした。

そんな彼に転機が訪れたのは、ある夏の日の夕暮れでした。それはたしかに、ふとしたはずみ、だったのです。

海岸沿いの道を自転車で走っていた学者は、うつろな目で首を左右にゆらしている大きな亀を見かけました。亀は苛められていました。子供達が苛めていたのです。

誰かが誰かを苛めている様子が心地よいはずがありません。けれども、亀にも子供達にも関わりあいたくありません。

「別の道を通るべきだったな。」

彼は舌打ちして、ペダルを漕ぐ足を早めました。

腰を浮かして、一気に両足に力を込めたその時。彼の頭の中にふと思いつく浮かぶものがありました。

「そういえば、そんな王国があったっけ。」

今まで忘れていた王国のことが、突然ふと思いついたのです。

王国。そう、王国……。

なぜ、今まで忘れてしまっていたのでしょうか。なんてうっかりしていたのでしょうか。

学者は、自分がどんどんやる気に満ちてくるのを感じました。

次から次へと新しいアイデアが湧いてきました。こんなことをしている場合ではありません。

「王国！王国！王国！王国！」

気付くと、彼らしくもなく大声で叫びながら、猛スピードで自転車を漕いでいました。

子供達は怖がって、亀を放り出したまま逃げて行きました。子供も亀も、彼にはどうでもいいことでした。

それからというもの。彼の生活は一変しました。

「足りない何か」とは王国のことだったのです。これで何もかも解決するはずなのです。どの文献を調べても、「王国」のことは何もわかりませんでした。そしてそれこそが、「王国」が「足りない何か」であることの何よりもの証拠でした。

これは王国へ行って、実際に自分の目で確かめなければならぬと思いました。

彼は何一つ持っていませんでした。資金も、経験も、頼りになる知人も。あるのは、若さと、情熱だけでした。若さと情熱でできるのは、あきらめないことだけでした。彼は決してあきらめませんでした。いっそうに勉強に励み、あらゆる国の言葉を、あらゆる生き物の言葉をマスターしました。

こうして準備が整いました。

けれども、そこまででした。あきらめなければ続けていくことはできますが、続けたからといって必ずしも何かが起こるわけではないのです。

悩んでいる学者のところへタイミングよく一匹の大きな亀が訪ねてきました。学者はとても驚きました。

亀は得意そうに甲羅をかたかた鳴らしながら云いました。

「私のことを覚えていませんか？」

学者は覚えていませんでした。

「え…。」

亀は驚いて首をぐいと上げ、学者を見つめました。

しばらくそのままじっと見ていました。

亀の目は、人を否応なく内省させる目でした。

「いや…でも…私の人生が亀と擦れ違うようなことはこれまで…。」

…あ。ありました。一度だけ。

「子供の頃、夜店で緑亀を買ってもらったことがあります。洗面器に入れて大切に育てたのですが、いつのまにかいなくなってしまうました。ずっと気になってはいたん

です。あんなに小さかったのに、ずいぶん大きくなったんですね。」

「夜店で売ってる亀がこんなに大きくなるはずがないじゃありませんか。」

亀はたいそう憤慨して云いました。

「違いましたか。すみません。」

「本当に、覚えてないんですか。」

「すみません。」

「じゃあどうしようもないですね。帰ります。」

「帰るんですか？」

「用がないので。」

「すみません。思い出します。ヒントを下さい。」

「無理に思い出さなくても。どうせまたすぐ忘れれますよ。」

「どうしてそんな意地悪を云うんです。」

「意地悪なのはあなたの方です。」

「私が苛めてるようなことを云わないでください。」

突然、学者の脳裏に、夕暮れの、浜辺の光景が閃きました。

「あ…あなたはあの時の…。」

「思い出して頂けましたか。」

亀は嬉しそうに甲羅かたかたいわせながら言いました
学者の頭の中には、あの日の出来事が走馬燈のように蘇っていました。

けれども。

「あのときの亀が何故、私のところに？」

「わかりませんか。」

「わかりません。」

「欲のない人ですね。」

亀はあきれたように言いました。

「助けられた亀は恩返しをすることになってるじゃありませんか。」

「なってるかどうかなんて知りませんよ。そもそも私はあなたを助けた覚えがないし
…。」

「助けてくれたじゃないですか。私が子供たちに苛められていたとき…。」

「ええ?!」

「あんなに怖い顔をして、大きな声を出して、子供達を追い払ってくれたじゃありませんか。」

「ああ。」

学者はちょっと恥ずかしくなりました。あの時の自分は、さぞひどい形相をしていただ
ろうと思ったのです。

「あなたのお陰で命拾いました。」

亀は心からの感謝を全身で表して云いました。

「ですので今日は恩返しに参りました。」

「そんな、いいですよ。別に大したことした訳じゃないし。」

「いいえ。そういう訳には。」

「だって、竜宮城へ連れて行かれるんでしょう。」

「お望みなら。」

「それでタイやヒラメが踊ってるのを見るんですよね。」

「最近ではもっと凄いのもあるんです。」

「もっと凄いのって何ですか？」

「私の口からはとても…。」

「…遠慮します。魚が踊ってるのを見て楽しむようなあれは、ちょっと…。それに、私
は他に行くところがあるのです。」

「知ってます。」

学者はびっくりしました。

「な…何故？」

「調べたんです。」

「恩返しは懸賞ではありませんから、行き先をこちらで指定することはありません。竜宮城を希望されるなら竜宮城へご案内しますが、そうでないなら…。」

学者は、やっと、亀が自分のところを訪ねて来た理由が飲み込めてきました。

「それはつまり…、王国へ行きたいければ王国へと…。」

「言っている訳なんです。」

学者はショックでしばらく口が聞けませんでした。こんなことがこんなふう簡単に起こってしまったのでしょうか。

「いいんです。」

亀が言いました。

「でもなぜあなたが王国のことを知ってるんです？」

「調べたんです。」

「どうやって？」

「内緒です。」

「人に言えないような方法で、ですか？」

「まあね。」

「分かりました。聞きません。では、連れてって下さい。背中に乗ればいいんですね？」

「ちょっと待って下さい。」

亀が慌てて言いました。

「それは無理です。降りて下さい。」

「えっ?!」

こんどは学者が驚く番でした。

「私はそこまで大きな亀ではありませんし、第一、王国がどこにあるのか知りません。」

「ええっ？」

「亀のネットワークを駆使して、かなりいいところまではいったんですが…。」

「が？」

「場所を特定することまではできませんでした。私は学者ではありませんしね。」

「ではそのネットワークを教えてもらえませんか？そうすれば私は自分で…。」

「駄目です。水面下で活動する秘密組織なんですから。」

亀は口が堅いのでした。

「亀さん。」

学者はなんだか苛々してきて、亀に言いました。

「それではあなたは一体、何をしに私のところへやってきたんです？」

「ですから恩返しを…。」

「恩返しをしようとする意欲を見せに来たんですか？」

「まさか。」

「じゃあ、何ですか？あなたは何を調べて、何をつきとめたんです？」

「海です。」

亀は言いました。

「何ですって？」

亀は甲良に背負った風呂敷包みを開けると、中から大きな、少し黴臭い地図を取り出しました。

「私たちのネットワークで特定できるのは海までなのです。」

「あの、例の水面下の地下組織ですか？」

「水面下の秘密組織です。」

亀は地図を広げました。巻き癖がついていて、なかなかうまくあいに開かないよう

でした。

「この辺りの海…。」

亀は、地図が巻き返らないように後ろ足で押さえながら、前足で青い部分を指しました。

「この海のどこかにある島だということが分かっています。」

「この海のどこか…。」

「そうです。それから、この大陸のこここのところに小さな半島があります。」

亀はそう言って別の場所を指しました。

「この半島が王国となんらかの関係がある…ということも分かっています。」

「じゃあ。」

亀はこくりとうなづきました。学者は亀の頭をほとんどん叩いて何度もうなづかせてみたり衝動にかられましたが、亀が怒りそうなので我慢しました。

「その、半島を目指して行けば…。」

「まあ、そういうわけで。」

「それならそうと、早く言ってくればいいじゃないですか。」

「説明しようとしたのですが、その前にあなたに背中に乗って来たのです。」

学者と亀は地図を挟んで手と手を取り合いました。二人の間で、地図はくるくると巻き上がりました。

「ありがとうございます。」

学者は心から感謝して、亀に言いました。

「いえいえ。当然です。恩返しなんですから。」

「失礼なことを言ったりして。」

「水面下の地下組織ですか？」

やっぱり気にしているのです。

「…とか、いろいろです。」

「いいんですよ。でも、これからが大変です。」

「はい。」

「どうぞいい結果を持って帰ってきてください。」

「はい。」

「なんか、綺麗にまとまっちゃいましたね。」

「はい。」

「新しい出発ですものね。」

「…はい。」

「では、帰ります。」

地図をおいたまま、亀は浜辺へと帰って行きました。学者は夕日を背に去って行く亀の甲羅を、見えなくなるまで見送っていました。

そういうわけで。

少々胡散臭い話ではありますが、でも今度こそ、学者は王国を目指して旅立つことができましたのでした。

*
*

山を越え、谷を走り、川を下り、海を渡って、若い学者は旅を続けました。

考えていた以上に、道のりは遠く険しいのです。考えていた以上に、世界は大きく、複雑なものでした。そして彼の知らない様々な大切なことに満ちているようでした。旅を続けていると、自分がとても無力な存在に思えてきました。するべきことはもっと他にありそうな気がしてくるのです。それはとても惨めな敗北感でしたが、その敗北感にはどこか気怠い、麻痺のような快感が潜んでいました。自己否定のナルシズムとでもいましょうか。彼は何度も何度もそれにとりつかれ、足を止めそうになりました。

もし彼に少しでも財産があり、あるいは人脈があり、あるいはもっと年齢を重ねていた

ならば、途中でその快感に魅了されて敗北を選んでいたかも知れません。けれどもそうするには彼はあまりにも無力なのです。始めてしまったことを後悔し、別の道を選び直すだけの余裕がないのです。既に起きてしまったことの上に、これからのことを重ねていくしかないのです。

「王国へ。」

学者は呪文のように何度も唱えました。自分自身に言い聞かせるために。そして、誰かが偶然聞いていて、王国への道を教えてくれますように、という願いを込めて。

亀が教えてくれた小さな半島へ辿り着くまでに、ずいぶん時間を費やしました。やっと辿り着いた時にはもうかなり疲れきっていました。疲れながらも、心の中は爽やかなあきらめと期待に満ちていました。

「もう、引き返せない。無事王国へたどり着いて、その存在を解明して帰らなければ。」ここからが、本当の旅のはじまりなのでした。

二章 兎と栗の木

ほこりっぽいでこぼこした道に、血痕のようなしみがうっすらとついていました。それは、途切れ途切れに道の向こうへと続いていました。学者は、それを追ってみることにしました。ここから先はもう、何を頼るわけにもいきません。出会った人に尋ね、出くわした出来事をよりどころにして進んでみるしかないのです。

「被害者は、何者かに追われていたに違いない。」学者は推理しました。

いくつもの野を越え、いくつもの山を越え、血痕は続いていました。

「これは、強靱な体力の持ち主に違いない。」

はあはあと息をしながら、学者は再び推理しました。

3つ目の山を越えた頃から間隔が一定になり幅も狭くなってきたと思ったら、大きな栗の木の下でぶつりととぎれて止まっていました。

そこには大きな白兎が倒れていました。白い毛皮がゆっくりと波打っていました。まだ、息があるようでした。

「あの…大丈夫…ですか？」

兎は弱々しく目を開けて、赤目がちの目で、こちらを見ました。

「なんです？」学者は兎の口元に耳を付けて尋ねました。

「ま……まだらのひも……」

「ひもがどうかしたんですか？」

「ひもの……時計が……」

時計？兎は自分の首を指差しました。そこには細いまだらのひもが首飾りのように下がっていました。ひもの先は引き契られたようになっていました。

「時計が、どうしたんです？」

兎は目を伏せて、口元をひくひくと動かしました。

「心身に深く傷を負い、とても話をする気分じゃないんですね。」

兎は少しだけ顔をあげると、目で、そう、と言いました。よく見ると体中に傷を負っていました。学者は、荷物の中から、薬と包帯を取り出し、応急の手当てをしました。兎は黙って申し訳なさそうにしていました。大きな兎に包帯をまくのは骨の折れる作業でした。中でも両耳の間に受けた傷の手当ては難しいものでした。顔のまんなかを通して包帯を巻けば息をするのが苦しいでしょうし、かといって、どちらかの耳の周りをまくようにすればずり落ちてしまいます。

学者はしばらく考えて、両方の耳にひっかけた包帯を、耳の間でクロスさせました。こうすれば、左右の包帯が耳の谷間で傷口をカバーしながらずれないように互いに押さえ合うことができると思ったのです。

時間をかけて包帯を巻き終わると、学者は兎に尋ねました。

「なにか食べますか？チョコレートはどうですか？」

兎は首を激しく左右に振りました。

「にんじんを。私のにんじんをとってもらえませんか。」

「にんじんを？どこから？」

「私の背中に筒が……」

なるほど。そういえば兎は黒い細長い、立派な筒を斜めに背負っています。ポスターでも入っているのかと思っていました。

「筒を、どうすれば？」

「筒の底にあるふたを開けてみて下さい。」

学者は不審に思いながらも、兎の言う通りに行ってみました。

ふたを外すと、緑の葉のふさふさした人参が、ストンと滑り落ちました。

その筒は大きな人参が5本、縦に入る大きさでした。なかなかよくできた入れ物です。ですけれど。

細い筒の底から、ふさふさの葉を痛めずに5本の人参を入れるのはさぞかし難しいだろう、と学者は考えました。

「反対側に入れるところがあるんです。」苦しい息の下から、兎が言いました。そして、目を伏せたまま学者の手から人参をもぎとると、両手で一生懸命持って、ぼりぼりとかじりはじめました。

なんともいえない、甘酸っぱい感覚が学者の背中を貫きました。彼は思わず身震いしました。

ああ、自分はきつと、こんなふうに、目の前で、大きな兎に大事そうに人参を抱えて、前歯でぼりぼりとかじってほしいとずっと思っていたのだ。いや、そんなはずはない。そんなはずが…。

「い…いつも、そうやって人参をかじるんですか？」

「いつもではありません。でもたまにかじります。」

兎はゆっくりと大儀そうに首を傾けて、言いました。

「あなたがそうやって人参をかじっていると、見ていてもいいでしょうか。」
 言ってしまったから。猛烈に後悔しました。なんてばかげたことを。恥ずかしくて、穴があったら、いえ、穴がなければ掘ってでも、全身すっぽり埋まってしまうと思いました。

「なにをしているんです？」

兎は赤い目をしてゆっくりと言いました。

「あ…穴を…」

「穴なんか掘らないで下さい。ここは栗の木の根元ですよ。穴なんか掘ったら栗の木が倒れてしまいます。」

「そんな大きな穴を掘るつもりでは…」

「小さい穴を掘ってどうするんですか。」

どうするのでしょうか。

「に…人参を…植えたらどうかと…」

兎は悲しそうな目をして、ぶんぶんと首を二回振りました。

「…申し訳ありません。ちょっと…その…」

学者はしどろもどろに言い訳しようとしました。

「いいんですよ。よくあることです。何なら、しばらくこうやって持っていましたよ。」

「いえ。とんでもない。あなたにそんなことをさせるわけにいきません。」

「でも。助けていただいたんですから。」

学者の目の前で、傷付いた兎は人參を大事そうに抱えて一口ずつ丁寧に嚙っていきました。

学者は、なんだか自分がとても淫らで身勝手な快楽を得ているような気分になってきました。

「あなたにそんなことをさせるなんて、私は…私の…いえ、許されることはありません。」

「何がですか？」 ぼりぼり。

「すみません。ああ…どうしよう」

「何をですか？」 ぼりぼり。

兎は人參を最後までかじり終わると、しっぽの部分をぼむっと口の中へ押し込みました。学者は、結局、最後まで、まばたきもせずその姿を見ていました。

「なんですか？」

兎が、不審そうにこちらを見ました。学者は慌てて云いました。

「あ、あの…、いったい何が、何があったんです？」

兎の目から涙が一筋つうとこぼれました。

「時計を…」

「時計を？…時計を、盗られたんですか？」

兎はこっくりとうなづきました。

「この、まだらのひもの先に結んであったんですね。」

兎はこっくりとうなづきました。

「誰にとられたんです？」

兎は、今度は黙ってじつじつとつぶわいていました。よほど辛いことがあったのでしよう。

「どんな時計です？」

「…。」

「いったいここで何があったんです？」

「…。」

これ以上質問をつづけるべきではないのだろうと学者は思いました。

答を聞いたところで、彼にはどうすることもできないのです。

「私はあなたのためになにができるでしょうか。」
兎に向かって尋ねてみました。

「わたしのために、なにかしてくれませんか？」

兎は少しだけ首を傾けて、目を見開いて云いました。

「私にできることがありますか？あるなら、遠慮なくなんでも云って下さい。」

「では。お言葉にあまえてお願いしたいことがあります。」

兎は顔を上げ、大きくふうと息をはいて、言いました。

「私はもうすぐ死んでしまいます。せっかく手当てして頂いたのに本当に申し訳ないのですが、私の受けた傷は兎が生きていくには少し大きすぎるのです。」

「そんなこと、云わないで下さい」

「けれどもそうなのです。私が死んだらこのまだらのひもを使って、この栗の木に私の亡骸を吊して貰えませんか。どうかお願いします。」

「何ですって」

「この時計のように。私を栗の木の首からつり下げてほしいのです。」

「そんなこと、できるわけがないじゃありませんか。」

兎は悲しそうに目を伏せて、言いました。

「なんでもしてくれと言ったじゃないですか。」

「それはあなたに早く元気になってほしいからです。」

「私は早く元気になるよりも、栗の木に吊してほしいのです。」

学者はなんだか悲しくなってきました。

……暴力。そう、暴力だ。と学者は思いました。

「あなたの要求は、私にとってはとても暴力的なものに思えます。」

「あなたにとってはそうなのでしょう。」

かわいそうな学者は、もう、どうしたらいいのか全くわかりませんでした。

兎は、残った力を振り絞り、立ち上がると背中中の筒を器用にぶんと前へ回して、下のふたを外し、ストンストンと残りの人參を滑り落としました。

「ここに人參が二本あります。」

兎は言いました。そこには人參が二本ありました。

「この二本の人參は、私が死んだ後、あなたの掘った穴に埋めて下さい。」

「いえ、あの穴はそんな……。」

「責めてるのではないんです。むしろ感謝しています。」

学者は黙り込んでしまいました。兎も黙り込んでしまいました。興奮して話をしたせいか、兎はさっきよりも激しく肩や耳で息をしていました。

「あなたは、どこへ行こうとしているんです？」

ふいに兎が尋ねました。

どこへ：行こうとしていたのでしょうか？

「王国：そう、王国へ。」

「それなら、山を越えて、西へ。」

兎は息をはずませながら言いました。

「山を越えて、西へ。」

学者は口のなかで繰り返しました。

そのとき。突然、兎が激しく咳込んだかと思うと、次の瞬間には、ぐったりと学者の腕の中で動かなくなっていました。

「しっかりして下さい！」

学者は大声で兎を呼びました。兎の体は急速に冷たくなっていきました。兎を支えてい

る学者の両手は激しく小刻みに震えました。熱く焼いた鉄の刃物に内臓を引き裂かれるように、下から上へ、ぎりりと胸が痛みました。

学者は、しばらく、兎を抱いたまま、そこへ立ち尽くしていました。

ずいぶん、長い間、そうしていました。

やがて。失くしたはずの兎の時計が、まだらのひもの先でこくこくと時を刻むのを、学者はたしかに感じました。それは、止まってしまった兎の心臓の鼓動と全く同じ早さで、空気を震わせていました。

学者は大きく息を吐きました。そして兎の首からまだらのひもを抜き取ると、長い二つの耳を束ねてきゅっと縛り上げました。

栗の木の太い幹はちょうど学者の頭の上のところまで二つの枝に分かれています。学者は、兎を縛ったひもを幹の途中の括弧に引っ掛けてしっかりと固定しました。それから兎の言った通り、小さな穴の中に二本の人参を埋めて土を被せました。

もう、ここに理由がありませんでした。

ここでいったい何があったのか、考えようにも考える材料がないのです。

あっという間に、それらはこの場所からすっかり消えてしまったのです。

「山を越えて、西へ。」
兎の二つの丸い目を、学者は思いました。大事に抱えた人參を、ぼりぼりとかじっている、兎の前歯を思いました。包帯の巻きにくい、二本の耳の間を思いました。
「王国へ。」
そして山を越えて西へ、と旅を続けたのです。

三章 ミルクホール

日が変わらないうちに峠を越えて向こうの丘陵地へ辿り付こうと、学者は考えていました。山を越えて西の丘へ行ってみれば、新しい道が開けて来るにちがいありません。しかし。

何と言っても暑いのです。真昼の太陽は空気も空も、そして地表のあらゆる物を端からじりじり焦がしていました。照り付ける太陽に挑みかかるように、学者は一步一步気合を入れ坂を上っていきました。すぐそこに見えているようなのに、頂上はいつまでも遠いのです。

学者は立ち止まり、腰に巻いたタオルで流れてくる汗を拭きました。

そのとき。

がたたん。ごろろ。がたたん。ごろろ。

背後から大きな音が聞こえているのに始めて気が付きました。音は早くなることもなく、遅くなることもなく、計ったように一定の速さでずっと続いていました。学者は気にな

ってふと後ろを振り返りました。

それは牛の引く荷車の音でした。

大きな荷車を不器用にがたごと左右に揺らしながら、一匹の牛が引っ張っていました。帽子を被った男が一人、荷車の横について涼しい顔で歩いていました。牛のほうも、特に暑そうな様子もなく、普通の牛の顔をして歩いていました。

「暑いですね。」

男はこちらを向いて云いました。

「全くです。」

学者は反射的にそう答えました。微かな違和感を感じたのですが、それが何なのかはわかりませんでした。

「もうすぐ峠ですね。頑張りましょう。」

帽子の男は涼しい声で続けました。

「はあ…。」

学者は彼に尋ねました。

「何を運んでいるんですか？」

「牛乳です。私は牛乳屋なんです。」

帽子の男は答えました。

「ああ。牛乳屋なんですか。」

「ええ。」

牛乳屋は答えました。

「そしてこれが乳牛です。」

牛がこちらを見て、軽く会釈しました。

学者はなんだかどきまぎしてしまいました。

「乳牛ですか。」

「ええ。」

なるほど。白黒まだらのそれは、たしかに乳牛のように見えました。

荷車の上には、大きな銀色の牛乳缶が三つ、丁寧に積んでありました。

「どちらまで運ぶんですか？」

「この峠の向こうまでです。」

「大変ですね。」

「そうなんです。この暑さですから。」

「暑いですか？」

「暑くありませんか？」

「いえ…私はもちろん暑いです。」

「でしよ。」

牛乳屋は涼しい顔で太陽を見上げました。

乳牛も、普通の牛の顔で、太陽を見上げました。

違和感はおくおくと大きくなりました。

「暑い時に牛乳を運ぶのは大変なんですよ。」

牛乳屋は乳牛の肩をぽんと叩いて立ち止まりました。乳牛も足を止め、牛乳屋の顔を見上げました。

「一休みしませんか。」

そこはちょっとした木陰になっていました。

「はあ…。」

学者もつられて立ち止まりましたが、どうしたものかと思いました。特に急ぐ旅ではないのですが、ここで牛乳屋や乳牛と一緒に休憩する理由も無いような気がしたのです。そんな学者にお構いなく、牛乳屋は腰に吊した麻袋の中から茶碗を二つ取り出して、言

いました。

「冷たい牛乳を一杯、いかがですか？」

その申し出はたいへんに有り難いものでした。さっきから喉が乾いてたまらなかったのです。

牛乳屋は大きな牛乳缶のふたを外すと、全体をよいしょと傾けました。白い液体がたぶたぶと茶碗の底を打ち、小さな茶碗はみるみるうちにとろりとした液体でいっぱいになりました。

「どうぞ。」

「いただきます。」

学者はぐいと茶碗を傾け、中身を一気に飲み下しました。ひんやりとのを湿らせた白い液体が、一瞬の消失の後ずんと内臓に落ちていきました。冷気が体中に染み通っていくのを感じました。

「ああ。こんなに冷たいとは思いませんでした。生き返るようです。」
学者は思わず呟きました。

「そうでしょう。もう一杯いかがですか？」

「あ。どうも恐縮です。」

二人は荷車のへりに腰掛けて、茶碗を傾け合いました。強い陽射しが相変わらず、斜面をちくちくと刺していました。

「あなたはどちらまでいかれるのですか？」

不意に牛乳屋が尋ねました。

「はあ…私はちょっと…。」

通りすがりの牛乳屋にどこまで説明したものが、ちょっと考えて、学者は言葉を濁しました。

「…その、王国を…探しています…。」

「ああ。その王国の話なら、聞いたことがあります。」

牛乳屋はお天気の話をするかのように、さらりと言いました。

「え？…存じなんですか？」

学者はおどろいて聞き返しました。いえ。聞き返したと言うよりは、問い詰めた、と言ったほうが正確かもしれせん。学者の勢いに、牛乳屋はちょっと戸惑っているようでした。ただならぬ二人の気配に、乳牛も戸惑っている様子でした。

「いえ。詳しいことは知りません。ただ、そんな話を聞いたことがある、というだけなんです。」

「一体どこで聞いたんです？」

「得意先のミルクホールですよ。」

「ミルクホール？」

聞き慣れない単語に、学者はひるんでしまいました。牛乳屋は相変わらずの涼しい顔で続けました。

「そのマスターが、旅の好きな人でね。」

「ミルクホール…にはマスターがいるんですね。」

喫茶店のような所なのでしょいか。

「ええ。ずっと最前にしてもらっています。長いつきあいです。あそのマスターほど牛乳の分かる人はちょっといません。」

「牛乳が分かるんですか…。」

「あそのマスターにはどうしても適いません。教えられることが多いのです。」

「牛乳屋は一体、マスターに何を教わっているのだろう。」

気にはなりませんが、特に尋ねてみる気にはなりません。尋ねればおそらく専門

的な内容の話が始まるのだらう思いましたが、学者は牛乳に関して、無知であるのと同じくらい無関心でもあったのです。

彼は、話を王国に引き戻すべく、さりげなく話を迂回させました。

「その…マスターは、よく旅行されるんですか。」

牛乳屋は素直について来てくれました。

「ええ。そうなんです。年の半分はどこかへ出掛けていて、残りの半分の期間だけミルクホールを営業しているんです。」

「王国へも行かれたんでしょうか。」

学者は単刀直入に尋ねてみました。

「さあ。そこまでは。」

牛乳屋は申し訳なさそうに首を傾げて言いました。それは思い出せなくて申し訳ないと言ふよりは、むしろ興味のない話題だったので注意して聞いていなかった、とう感じでした。学者は、これ以上牛乳屋と王国の話をして無意味だと思いました。次に会うべくは、ミルクホールのマスターなのだ。

「その…ミルクホールへ私も行ってみたいんですが。」

牛乳屋の目がきらりと光ったような気がしました。

「牛乳がお好きなんですか？」

「は…い…もちろんです。」

「それなら、ぜひ行くべきです。一緒にしましょう。私達もこれから牛乳を届けに行くところなんです。」

牛乳屋は腰を上げました。

木陰で寝そべっていた乳牛も立ち上がって伸びをしました。

牛乳屋は二つの茶碗をもとのように腰の袋にいれ、口のところの紐をきゅっと引っ張って締めました。

太陽は相変わらずでした。木陰を出た途端、学者の首筋からは汗が吹き出してきました。二人は並んで歩き始めましたが、やはり、牛乳屋の方は汗をかいている気配がないのでした。

「暑くないのですか？」

学者は尋ねました。

「暑いですよ。」

「本当ですか？」

「ええ。どうしてです？」

「いえ……。暑そうには見えないものですから……。」
牛乳屋は黙ったまま、ちらと刺すような目で学者を見ました。学者は、全身の汗が引いて行くのを感じました。牛乳屋はそして、そのまま顔色も変えずに前に向きなおると、何事もなかったかのように歩き続けました。学者は混乱しました。何か、自分は彼の気に障るようなことを言ってしまったのだろうか。でも、一体何がどう気に障るといいうのでしょうか。

ともかく。今、彼の機嫌を損ねてはいけなと思います。ミルクホールのマスターに会わなくてはならないのです。会って手掛かりを貰わなければなりません。目的を見失ってはいけないと学者は思いました。これ以上何を言えばこの気まづさが払拭されるのか、あるいは、これ以上何を言えば、この気まづさが増殖されるのか、彼には分かりませんでした。牛乳は、素知らぬ顔をして、牛らしく荷車をひいていました。

しばらく黙って歩いているうちに、けれども学者は、ふと思いつきました。話の接ぎ穂を失ったときには相手の最も関心のあるものを話題にとりあげてみる、というのが会話の定石ではなかったでしょうか。

「この牛乳は、何軒ぐらいの家や店に配達されるのですか？」

話のとっかかりを作るために、牛乳屋に話し掛けてみました。幸いなことにこの質問は牛乳屋の気分を害すことはありませんでした。学者は心の中で「よし。」と思いました。このきっかけを大切にしないで。

「一件です。ミルクホールへ納品するんです。」

「全部ですか？」

「そうです。」

「……。」

ああ。けれども何かが違うのでした。何が何と違うというのでしょうか。話のテンポが少しばかり合わなかった、というだけのことです。全部がミルクホールに配達されたって構わないのです。牛乳屋の機嫌も損ねていないのです。でも……。学者の気持ちが落ち着かないのでした。

まあ、そういうことだってあるさ、学者は割り切って会話を進めることにしました。

「この缶の中の牛乳は、荷車を引いてるこの牛乳の牛乳なんですか？」

「違います。」

「え？」

「この牛乳の牛乳ではありませんよ。そんなことがあるわけないじゃないですか。」

「……。」

「この乳牛の牛乳は、今頃別の乳牛が別の荷車で配達しています。」

「なるほど。それはミルクホール以外のところへ運ばれていくんですね。」

「いいえ。ミルクホールです。」

「……。」

「うちの得意先はミルクホールです。もう、ずいぶん長いつきあいになります。」

「……。」

ああ！学者は坂の頂上に向けて、大声で叫びそうになりました。

でも何故？彼が叫ぶ必要がどこにあるでしょう。第一、何と言って叫ぶのでしょうか。

乳牛が別の乳牛の牛乳を荷車で運んでいたっていいのです。

この乳牛の牛乳が別の乳牛の荷車でミルクホールへ運ばれて行ったっていいのです。

いいのですが……。

なんだか自棄になってきて、学者は機関銃のように牛乳屋に話し掛けていました。いきつくところまで行ってしまっ、自爆するほうが健康になれるような気がしたのです。

「ミルクホールの牛乳はおいしいですか？」

「さあ。どうでしょう。ミルクホールで牛乳を飲むなんて聞いたことがありませんから。」

「ミルクホールには何人くらい、客が入れるんでしょうか。」

「客なんて、入れたりしないとします。」

「ミルクを届けたら、空の缶を積んで帰るんですよね。」

「いいえ。新しい牛乳をたっぷり入れてもらってこなければ。」

「ミルクホールのマスターは、いつ旅行から帰ってこられたんですか。」

「つい昨日旅に出たところですよ。いつ帰ってくるかは私には分かりません。」

「ミルクホールのマスターに、どんなことを教わっているのですか？」

「そのときどきによって、いろいろです。人間関係の機微のようなものやなにげなく示唆してくれるときもありますし、人生論、恋愛論なんかに発展することもありますよ。」

さあ！どうだ！

学者は深呼吸しました。落ち着かない気分はどうにどこかへ吹き飛んでしまっていました。もうなんでも来い、と彼は思いました。心の中で限界まで膨れ上がった違和感は破裂して散り、跡には台風後の青空のような清々しい風景が広がり始めていました。

おそらく足の方も思わず早まっていたのでしよう。気が付くと頂上はすぐ目の前に迫っ

ていました。

頂上を挟むようにして、道が二つに分かれていました。

「意外と早く付きましたね。」

あいかわらずの涼しい顔で、牛乳屋は言いました。

「本当に。」

できるだけ涼しい顔をして、学者も言いました。

「ミルクホールはこっちです。」

牛乳屋が手招きしました。

「いえ。やっぱり私は。」

「ミルクホールへはいらっしゃらないのですか？」

「ええ。」

マスターが旅行中なら、行く理由がないのです。

「それは残念です。ではここでお分かれですね。」

「ええ。牛乳をごちそうさまでした。」

「いえいえ。どういたしまして。」

牛乳屋は乳牛を促すと、ゆっくりと東の道を歩き始めました。乳牛は出会った時と同じ

様に軽く会釈して、のったりと目的地へ向けて進んで行きました。

がたたん。ごろろ。がたたん。ごろろ。

荷車を左右に揺らしながら、乳牛は進んで行きました。

学者はしばらくそれを見送ってから、西の道を歩き始めました。

荷車の音が遠ざかると、辺りの音が戻ってきました。

学者は思わず耳を澄ましました。

遠くの方からかすかに聞こえて来る低い音があるのに、始めて気付いたのです。おそらくそれは滝の落ちる音でした。空気をくすぐるような湿った音が絶え間なく続いていました。東の方からゆるりと風に乗って流れて来るのでした。

学者の頭の中には、不思議な光景が浮かんですぐに消えていきました。消えて行ったというよりは、余りに馬鹿馬鹿しいので慌てて打ち消したのです。一体どうしてそんなものを思い浮かべたりしたのか、理由が全く分かりませんでした。

けれどもそれは例えようもなく、魅惑的な光景でした。途方もなく高いところから滝壺目掛けて落ちてくるのは、白い、とろりと溶けるような大量のミルクだったのです。それはいつまでも絶えることなく自らの轟音の中に、溶け込んで消えていきました。

「王国へ。」

学者は頭をぶるんとふって、峠を下って行きました。

四章 羊

山を越えると、なだらかな丘陵地帯でした。どっちを向いても青空だけがぼんと広がっていて、地面と空とを分けているのは大きな大きな弧を描く、一本の地平線だけなのでした。大きく息を吸い込むと、青空のうわずみまでも肺の中に取り込めてしまうように思えました。

眼下には街のようなものは見当たりませんでした。けれどもあちらこちらに点在している赤や青の点は、人々の生活する家の屋根のようでした。町へ降りて、どこかの家や道を尋ねることにしようと、学者はゆるやかな坂道を下って行きました。

土地の大部分は、畑や牧場でした。

道の脇には柵が張りめぐらされ、牛や羊が日だまりの中でたゆたゆと尾をふったり首を回したりしていました。牧場にいる羊というのはじつに汚いものです。水捌けがよくないのか、地面にどこどころにある大きな窪みには濁った水が堪り、羊の柔らかい毛は泥水に染まってまだらにかたまっていました。あの羊たちを並べてごしごし洗ってやったらどんなに気持ちがいいだろう、学者は思いました。

ですからその青年を見たときは、本当にびっくりしたのです。蛍光の水色のシャツを着て、だぶだぶの袖を肘のところまで捲り上げて、青年は一心に作業をしていました。

「…何をしてるんです？」

思わず声をかけた学者に、青年は、顔も上げずに答えました。

「羊を洗っているんです。」

井戸の前に羊たちを一行に並べて、先頭の羊の毛をこしごと洗っているところなのでした。学者は、青年の足元から始まっている、行儀よく並んだ羊の列の後方に目をやりました。

広い牧場を横切って、羊の列はどこまでも続いていました。最後列は見えなくなるほど、はるか遠くにありました。

「これを、全部洗うんですか？」

「はい。」

「どうしてまた、羊を、こんなにたくさん洗うんです？」

「これで全部なんです。」

青年は答えました。

それは学者の求めていた答えと、少し、違うような気がしました。

「みんなあなたの羊なんですか？」

「私は羊飼いなんです。」

青年は答えました。

それは学者の求めていた答えと、少し、違うような気がしました。

結局。

数時間後には、学者は荷物を下ろして、ここで羊飼いの青年の作業を手伝っていました。

羊飼いの青年が、手伝ってほしいと言ったからだだったか、学者の方からの申し出たのだったか、定かではないのですが。

学者は上着を脱いで柵に引っ掛けると、シャツの腕を肘のところまで捲りあげました。

「何から始めましょうか？」

羊飼いの青年に尋ねました。人を手伝う時には、その人のやり方に習うべきだと思ったのです。

「とりあえず、この子の体を拭いてもらえますか？」

羊飼いの青年は洗い上がったばかりの羊の背中に、大きなたっぷりとしたタオルをかけ

て、学者のほうへ差し向けました。羊はおとなしく学者の方へ歩いてきました。学者はタオルを広げて羊の全身をすっぽり包むと、角のところにひっかかないように注意しながら、羊の体を拭いてやりました。羊は気持ちよさそうに目を閉じていました。洗った羊を拭き上げるのはなかなか大変な作業でした。全身がウールでできているので、水切れがとても悪いのです。

「拭くまえに、一度しぼったほうがいいんじゃないでしょうか？」

学者は羊飼いの青年に相談しました。羊飼いの青年は二匹目を予洗いするために、桶で水をかけているところでした。

「細かい手順や何かはお任せしますから、好きにやってください。」
 そういわれても、羊をしぼるのは始めてなのです。

「新聞紙でおおまかに水分を吸い取ってからタオルで拭いたらどうでしょう。」

「それはだめです。せっかく綺麗に洗ったのにインクだらけになってしまいます。そうかも知れない。学者は思いました。」

「でも、これじゃすぐ時間がかかるし、タオルがたくさんいると思うんですが。」
 忙しそうに羊を泡立てている羊飼いの青年にいいました。

「タオルならたくさんあるから、どんどん使ってください。」

羊飼いの青年は水道の横の干し草の山を指して言いました。いえ、学者が干し草の山だ

と思っていたのは、うずたかく積まれた黄色と緑のタオルの山でした。それは遠く連なる羊の列を全て拭きあげるのに充分なだけの量があるように思えました。でも、だからといって…

「時間は有限ですよ。」

学者は学者らしく言いました。

「羊だって有限です。」

羊飼いの青年は言い返しました。学者は学者らしく観念しました。たしかに時間以上に羊は有限なはずでした。

「ドライヤーで乾かしたらどうでしょう。」

疲れた手を交互に休ませながら、学者はまた提案しました。

「痛むから駄目です。」

羊が迷惑そうに、こちらをじっと見ていました。

羊飼いの青年は二匹めの角のところを歯ブラシでごしごしと擦っていました。

学者は諦めて、一匹ずつ丁寧に、羊を拭き始めました。羊は気持ちよさそうに目を閉じ、時々首のところが左右に傾けてこりをほぐしたりしていました。一匹の羊を拭き終わる

のに、時間にして約二十分、タオルにして約三枚かかりました。約、というのは、その羊の大きさや性格によって誤差があったからです。羊飼いの青年が羊を洗う時間も、ほぼ同じくらいのものでした。なぜなら、学者が羊をひとつ、拭き終わると、間髪を入れずに次の羊が送られてきたからです。「洗う」ということと「拭く」ということの工程の違いを考えれば、羊飼いの青年の方がだいぶ手際がよかったのだということになります。始めの十六匹は、学者は一つ一つの作業をこなすのに精一杯で、とても余分なことを考えたり話をしたりするような余裕はありませんでした。せいぜい、たまに洗い場の方に目をやって、羊飼いの青年が羊を洗うのをちらちらと眺める程度でした。

全く、その作業には無駄がないのでした。羊飼いの青年は、列の最前列にいる羊を井戸のところへ連れてくると、まず桶で三杯、たっぷりと水を被せました。羊は風船がしぼむようにあつというまに小さく縮んでいき、青年はシャンプーを手の中で充分に泡立てると両側から包み込むようにして、羊の体を泡立てていききました。本体がおわると、くるんと巻いた角の汚れを歯ブラシでこすって落とし、最後にザブン、ともう一度桶で水をかけました。

「シャンプーを使うんですね。」

十七匹目をタオルでくるみながら、学者は羊飼いの青年に話し掛けました。

「ええ。」

十八匹を濯ぎながら、羊飼いの青年が答えました。

その後、羊飼いの青年はしばらく黙って洗い続けました。学者も仕方なく、黙ってしばらく拭き続けました。

三十匹が過ぎた頃でしょうか。青年はふと手を休めて学者に話し掛けました。

「手伝って頂いて、本当にありがとうございます。助かります。」

「いえ…。」

「嫌になったら、やめてもらっていいですから、気にせずおしゃってください。」

「でもこんなにたくさん羊たちを一人で洗うのは無理ですよ。」

「大丈夫です。」

「…終わるまで手伝いますよ。」

「いいんですよ。無理しなくて。」

「でも、せっかくだから最後まで付き合います。」

羊飼いの青年は、そういえば聞いてなかった、とでもいう風に学者の方を見上げて尋ねました。

「この後どちらへいらっしゃるんですか？」

「いえ。その…王国へ。」

「王国…。」

「ご存じですか？」

学者は王国について知っている限りのことを説明しました。

「ああ。そういえばそんな王国があったような気がします。」

羊飼いの青年は何かを思い出すかのように、羊の果てに目をやって言いました。

「何か、手掛かりになるようなことをご存じなら、教えていただきたいんですが…。」

「私にはわかりませんが…。この辺で尋ねるよりは、川を越えて西へ向かった方がいいかも知れません。」

「川の向こうには何があるんですか？」

「いえ…。人間の数の問題です。この辺には牛や羊しかいませんから。」

確かに、羊を訪ねて回るよりは可能性がありそうな気がしました。

「川までどれくらいありますか？」

「ずいぶんかかりますよ。歩いて行くんでしょう？」

「川は越えられますか？」

「大きな釣り橋が架かっていますから。」

「それはいいことを教えてもらいました。ありがとうございます。」

「いえいえ。」

「お礼に、頑張ってお手伝いしますよ。任せて下さい。」

「無理しないで下さい。本当に。」

「だって二人でやった方が早く終わるじゃないですか。頑張らしましょう。」

「そうですね。」

嫌な予感が、学者の全身をよぎりました。

「あの。羊は…全部で何匹いるんですか？」

おそろおそろ、たずねてみます。

「さあ。」

「いや…でも…まさか…。」

「まさか？」

いや。そんな筈は…。学者は思いました。そう、このタオル、タオルが何よりの証拠ではありませんか。タオルは…有限です。

「タオルのことなら心配しないでくださいね。」

羊飼いの青年は言いました。

「まだまだいくらでもあるんですから。」

学者は青くなって、牧場の至る所にうずたかく積み重ねられている干し草の山々を見つめました。

そう思っただけで見ればなるほど、それらはたしかに、全てがタオルの山なのでした。

今までの余裕はどこへやら、なんだか急に落ち着かない気分になってきました。

「でもさっき、羊は有限だって…。」

学者は、さすがのような口調で、羊飼いの青年に食ってかかりました。

「あたり前じゃないですか。羊が無敵だなんて聞いたことがありません。」

「あっ。」

学者は思わず声を上げそうになりました。そう。どうして今まで思い浮かばなかったのでしょうか。羊の、始まりについて。

「つかぬことをうかがいますが。」

「なんでしよう？」

「あなたは一体いつからここで羊を洗っているんですか？」

「どうしてそんなこと聞くんですか？」

どうして？ どうしてでしょう。

「それにどうしてそんなにあわてているんですか？ さっきまで落ち着いていたのに。」

「誰だって慌てる前は落ち着いていたと思いますよ。」

「そうですね、でも。急にそんなに。」

「そんなに慌てるように見えますか？」

「ええ。だって、手元がそんなにおろそかに…。」

学者が自分の手元を見やると、ぐっしょりぬれたタオルの下から、もう何匹目だかわからない羊が不満そうにこちらを見ていました。

「もう少し丁寧に拭いてやって下さい。それでは羊が可哀相です。」

羊飼いの青年が言いました。

「すみません。つい…。」

「気をつけてください。」

「あの…もう、駄目です。」

「どうしたんですか？」

「駄目なんです。これでは駄目何です。つじつまがあわないんです。」

「なにが合わないんですか？」

「すみません。なんだか気分が悪くて…。申し訳ありませんが、この羊で最後にしてもいいでしょうか？」

「もちろんです。無理しないで下さい。ただ、どうして急に？」

どうしてなのでしょう。学者は冷静になって考えようと思いました。羊の数が問題なのでしょう。タオルの数が問題なのでしょう。それに費やす時間が問題なのでしょう。どれも違うような気がしました。

そういう事ではなくて。そういう事ではなくて。

「…あなたがそうやって、いつからなのかもいつまでかも不鮮明なまま羊を洗いつづけている限り、私がタオルで拭く羊の量とあなたの洗う羊の量は、ずれていく一方なんです。つまり…そういうようなことなんです。」

「つまり、羊の、量が問題なんですね。」

「いえ…そうではなくて…いや、そうなのかな…そうなのかもしれない。」

羊飼いの青年はしばらく、何か考えなら手だけを動かしていました。学者はもはや手を動かすことままならず、呆然として羊飼いの青年の手元を眺めていました。そういう訳で、当然のことながら、洗われたけれども拭かれていない、つまりぐっしりと濡れたままの順番待ちの羊がどんどん学者の前にたまっていきました。羊たちは、迷惑そうな

顔をして、そろってこっちを見ていましたが、そのうち二人一組になって、お互いにお互いの身体を拭き始めました。学者がここにいる理由はなくなってしまったのです。

「申し訳ないけど、私はこれで失礼します。」

学者は羊飼いの青年に向かって言いました。

羊飼いの青年は聞こえているのかいないのか、相変わらず黙って羊を泡立っていました。学者は捲り上げていた袖を裾まで下ろすと、柵にかけていた上着を着込むと荷物をよしよと抱え上げました。

そして羊飼いの青年の教えてくれた釣り橋の方向を目指して、歩き始めました。

「ありがとうございます。」

背中羊飼いの青年が、慣れた口調で独り言のように呟きました。

振り返ると羊が、桶の水をザブンとかけられて縮んでいくところでした。

羊を洗いたいという気持ちはもうすっかり消え失せていました。

「王国へ。」

学者は釣り橋を目指して、西へ、歩き始めました。

五章 音の鳴る夜

釣り橋を渡り川を越えてからも、学者は歩き続けました。羊飼いの青年の言葉とは違い、不思議なくらい人気がない土地でした。たしかに羊には会いませんでしたが、羊以外の者にも出会いませんでした。黙々と、学者は旅を続けました。日が暮れるまで歩いて野宿をし、また日が昇るのを待っては歩き…という生活を、もう何週間も続けているのでした。

今日もいつの間にかやがて日が暮れてしまっていました。辺りはすっかり闇でした。

音が鳴るほど静かな夜でした。

あまりに静かでひっそりとしていて、夜そのものの音が聞こえてくるような、そんなふうな夜なのでした。学者は疲れ果てていました。一日中歩き続けて、手も足も棒のようになっっていました。

「このあたりで野宿することにしよう。」

彼は適当な場所を探すために、辺りを見回しました。何の飾り気もない、どこまでも地味な闇夜でした。月はおろか、星さえも出ていませんでした。深い、目の細かい闇だけが彼と音を包んでいました。意識すればするほど、闇は深まっていくようでした。じ

っと目を凝らしていればそのうち目が慣れてくる、という古典的な方法も、徹底した闇の前には全く無力でした。闇はどんどん密度を増し、そのうち、学者は自分が途方もない無の中に放り出されたような気がしてきました。理不尽な絶望感と強迫的な問題意識が彼に絡みついてきました。

頭の中にあっただはずの問題が、皮膚を破ってきりきりと突き入って来るような気がしました。

ああ。唐突に、彼は思いました。

観念とはきつと闇の中の実感のことなのです。あらゆる観念的な問い掛けが、ここでは現実の問題と背中合わせであるように思われました。彼は知らず知らずのうちに、呟いていました。

「自分は一体、どこにいるのだろう。」

「どこから来て、そしてどこへ行くのだろう。」

あんなに確かだったことが、今や手がかりを失ってぼんやりと漂っていました。いいえ。失ったのではなく、始めから何もなかったのです。でも。それなら、始めからあったのは一体何だったのでしょうか。

学者は混乱していました。正体不明の不安が、足元から突き上げてきました。

王国？

自分は本当に王国へ向かって旅しているのだったろうか。本当に、それは自分にとって大切なことだったのだろうか。

考え始めると、体中から悲しみが溢れて来て、目が開けていられなくなりました。うっかり目をあけると溢れる悲しみと一緒に、自分の中の芯のようなものも流れ出てしまうような気がしたのです。彼はじっと目を閉じて身体の表面に力を入れていました。何をしてみても駄目でした。膨らみ始めた悲しみはどんどん、水を含んだスポンジのように大きくなっていききました。彼は無の中で膨らむふやけた悲しみでした。けれども一体何が悲しいのかは、よく分かりませんでした。行けども行けども辿り着かない、不安な先行きのこと胸が痛くなることも確かにありました。けれども、今彼を膨らませている悲しみは、それとは少し、違うものなのです。

『自分は果たして王国へ辿り着けるのだろうか。』
ではなく。

『自分は本当に、王国を求めて旅立ったのだったろうか。』

王国

という、本末転倒な不安なのです。

長い間、身動きもできずに彼は闇の中にうずくまっていました。

どのくらいたったでしょう。本当に長い時間であったのかもしれませんし、もしかしたら実はほんの一瞬のことであったのかもしれない。気が付くと、闇はすっかり粗くなり、青い光が闇を制して漂っていました。月を覆っていた雲がいつの間にか去ってしまったのでしよう。あたりはすっかり平凡な夜の風景を取り戻していました。

学者はさっきまでの理不尽な闇の呪縛から解放されていました。

「なんだったんだらう。」

ほっとするというよりむしろ、馬鹿馬鹿しい気持ちになりました。光の呼び戻した現実の夜の中では、あの奇妙な悲しみや不安はとてくだらない錯覚であるように思われたのです。

雲の間から現れたのは、まんまるな月でした。満月の光は驚くような明るさで辺りを照らしていました。だんだんに目が慣れてくると、辺りの様子が分かってきました。道は大きくうねりながら、西へ西へと続いていました。道の両脇には、大きな木々が所々に黒い影を作っていました。十分に葉をつけた枝の隙間から月の光が漏れていました。

学者はあわてて一番近くの木の根元へ駆け寄りました。光が差しているうちに、安全なところへ寝床を拵えようと思ったのです。ちょうどいい具合に、根っこの中が空洞になっている大きな樫の木がありました。学者は穴の中へ滑り込みました。やっど。なにもかもがうまい具合に落ち着いたような気がしました。冷静に考えてみれば混乱する必要も安堵する必要もないはずなのでした。

彼は王国へむけて出発したのです。そして王国へ向かっているのです。

他の誰でもない、彼自身が。

月の光なんかもなくても。たとえ行く先がどこまでも深い闇に包まれていたとしても。

理性なのか強がりなのか分からないようなスローガンがやがて、夢の中へ消えて行きま

した。
夜が小さく、青い光を奏でていました。

六章 雨の中のかえる

高原の中の道は歩くのに快適でした。開けた視界に時折小鳥の声が響き渡る静かな環境は、学者を久々におおらかな気分にさせてくれました。このまま歩き続けたら、どこまでもどこまでも行けそうな気がしました。

けれども、昼を過ぎた頃から、急に雲行きが怪しくなってきました。だんだんに薄暗くなっただけと思ったら、すぐに大粒の雨がばらばらと降ってきました。学者はあわてて、近くにあったちっぼけな屋根の下へ駆け込みました。あちこち穴のあいた小さな粗末な屋根でしたが、とりあえず雨が凌げるだけでもいいと思ったのです。

それはどうやらバス停のようでした。

屋根のついたベンチの横に、申し訳のように標識が立っていました。棒のところ折れまがり、表面はひどく汚れていました。破れた屋根といい、この標識といい、今も使われているバス停だとはちょっと、思えませんでした。この高原の中を走るバスがあるとも思えませんでした。きっと、路線が変更した後、ベンチと屋根だけが撤去されずに残ってしまったのでしょう。

けれども……

ベンチの端に腰掛けようとした学者は、おどろいて声を上げそうになりました。
先客が居たのです。

大きな緑のかえるが、足をぶらぶらさせながら、ベンチの真ん中に腰掛けていました。
今あわてて駆け込んできたという風ではありませんでした。ずっと前からここでバスを
待っていたような居方で、彼はそこに居たのです。

「あの…。ここへ腰かけてもいいですか？」

学者は丁寧に尋ねました。けれども、かえるは前を向いたまま学者の方を見ようとし
ませんでした。学者は戸惑いましたが、事情はすぐに飲み込みました。

かえるの耳には大きなヘッドホンがはめられていたのです。

「音楽だ。」

学者は思いました。あれを付けて音楽を聞いていると、外からの音が遮断されて他のこ
とに注意が向かなくなってしまうのです。学者はかえるの近くへ寄って、指でベンチを
差しながら、もういちど言いました。

「こ、こ、へ、す、わ、っ、て、も、い、い、で、す、か、？」

かえるは初めて、自分以外の者が自分の隣にいることに気が付いたようでした。
学者の口元を見て

(おや。)

という顔をしました。そして、

(何か言ってる。)

と理解するとめんどくさそうに耳元のスピーカーを片側だけ外して、首を傾け、
(何か？)

という目で学者を見ました。なんだか学者の方があわててしまいました。

「ここへ腰かけてもいいでしょうか。」

学者はもう一度、丁寧に尋ねました。

ん、ん、とかえるは短くうなずき、

(どうぞ。)

と言うようにベンチの端へ向けて手を広げると、自分も腰を上げてささっと反対側へ詰
めて座り直しました。その動作は、なかなか板についていて感じのいいものでした。

「すみません。」

学者は恐縮して、かえるの空けてくれた場所へ腰を下ろしました。かえるはヘッドホン
を耳に戻すと、学者のことなど全くお構いなしに、さっきと同じ顔をして前を向いて座

りました。

「やみそうにないですね。」

かえるは学者の口元を見て、彼の言葉を判断したのか、

(ええ。ええ。)

というように何度かうなずきました。

「雨宿りですか？」

学者は尋ねました。かえるはまた、同じように、

(ええ。ええ。)

うなずきました。

「こんなところで雨に降られるなんて、運が悪いですね。」

(ええ。ええ。ええ。)

「どちらへ行かれるんですか？」

(ええ。ええ。ええ。ええ。)

「なかなかすてきなヘッドホンですね。」

(ええ。ええ。ええ。ええ。)

「何を聞いているんですか？」

(ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。ええ。)

なんだか変だな、と学者はやっと気が付きました。よくよく気をつけて見てみると、かえるは学者の話にうなづいているのではなく、彼の聞いている音楽のリズムをとっているのです。視線は標識の根元でびたびたと跳ねている雨の滴をとらえているようなのですが、その目は雨とは全く違ったリズムでらんらんと弾んでいました。学者のことなど、全く、眼中どころか頭の隅にもないのでした。

「一体どんな音楽を聞いているのだろう。」

学者は気になり始めました。彼の耳に入ってくるのはトタン屋根を雨が無遠慮にたたき、バ、バ、バ、バ、バ、バ、バ、バ、という音だけなのです。雨が草を撫でるシンシンという音だけなのです。すぐ隣に一体どんな魅力的な世界が広がっているのか、彼には全く分からないのです。

雨音はどんどん、激しさを増していきました。当分、やみそうにありませんでした。トタンのバ、バ、バ、バ、バ、バ、バ、バ、を聞きながら、学者はかえるの様子をぼんやり観察していました。雨を見ているよりは、変化があっただけのおもしろいような気がしたのでした。

かえるは学者の存在など完全に忘れ去っているようでした。注意してよく見ていると、首と膝が二拍子のリズムをとって小気味よく動いているのが分かりました。時折目をぎ

ゆっつぶり、肩から上を左右に激しく揺らしたりするのでした。揺れが激しくなると口元を得意そうに歪ませ、最後には脇を閉じ、胸の前で拳を握って、ボクサーのように小さく宙を殴りました。あるいは腕を組み、腰を引いて背中をもたせかけ、軽く目を閉じて水掻きのついた大きな足の裏でゆっくりリズムをとったりしました。そのしぐさがまた、なんとも優雅に、板に付いているのでした。かえるの動作は、目まぐるしく変化して行きました。じっと足の裏だけでリズムをとっていても、その時々で表情が違いました。あるときはぼおっと遠くを見やり、放心したように一点を見詰めています。たし、あるときは涙をためた目で、きっと唇をかんでいました。何か、大切な思い出が頭の中を巡っているのにちがいない、と学者は思いました。一体どんな音楽を聞いているのか、気になってたまりませんでした。身体を動かさずにいられないような、ビートの激しい音楽なのか。心地よく眠りに誘うような、ゆるやかな音楽なのか。うか。一体その音楽には彼のどんな思い出が詰まっているのでしょうか。雨はますます激しくトタンを打ちました。

突然、かえるのリズムが停止しました。かえるの顔が一瞬、(む。)と険しくなりました。

そして、ヘッドホンを外して首のところひょいとかけると、だるそうに屋根を見上げたのです。そして

(く。)と顔をしかめて体を引きました。

学者は、自分の中の何かが突然断ち切られたような気がして、ちょっと不愉快になりました。今やかえるのリズムはかなり薄められた状態であるにしろ、学者のリズムなのでした。

(む。)の原因はすぐに分かりました。

かえるの鼻先に、ぼたり、としづくが落ちてきたのです。屋根の破れ目から、雨のしずくが漏れているのでした。雨はちょうどかえるの頭の上の隙間から漏れ、彼の足元の床の上でびたん、と跳ねていました。

少し間をおいて、またぼたり、もうすこしおいてまた、ぼたり、とみるみるうちにその間隔は狭まっていきました。かえるは忙しく首を上げ下げしていましたが、やがてわきに寄せた鞆の中から大きなガラスのコップを取り出してきて滴の下へ置きました。

コップはぼたん、ぼたん、と滴を受け、ゆっくりと砂時計のように雨水を溜めていきました。かえるは満足そうに、しばらくそれを眺めていました。学者も、眺めていました。

やがて、かえるはふうと溜め息を付いて、そして学者の方へ向き直りました。

「ひどい屋根ですね。」

学者は言いました。かえるはうなずいて、学者の顔をじっと見ました。そのまましばらく、じっと見つめていました。

「よく降りますね。」

かえるはうなずいて、学者の顔をじっと見ました。そのまましばらく、じっと見つめていたのでした。

「なぜ、かえるが自分の顔を見ているのだろう。」

学者は悩みました。そんなことはかえるに聞いてみればいいのですが、なんとなく、聞いてはいけなような気がしたのです。

「あ。」

やがて学者は気が付いて、かえるに言いました。

「こっちへ、詰めましょうか。」

うっかりしていました。さっきまでかえるが腰かけていた場所にはコップが雨を受けて

いて、このままでは彼の座るところがないのでした。かえるはにっこり笑って、むん、と首を降りました。

「気が付かなくて。どうぞ。」

学者は自分の荷物を寄せて、かえるのために席を詰めました。黙って、荷物をかかえて、かえるはすぐにやってきました。そして学者の横にひよいと腰掛けると、首に引っ掛けたヘッドホンを持ち上げて、耳の位置にセットしました。そして、再び音楽の中に戻って行きました。

学者はまた、ひとりぼっちになってしまいました。かえるとの距離は、さっきよりも近くなっていました。が、何故だかさっきよりも遠く隔たっているような気がしました。ひとりぼっちでいるよりずっと寂しいような気がするのです。

かえるは相変わらず体中でリズムを刻んでいました。じっと見ているうちに、学者には、かえるがリズムを受けているのではなく、リズムを作り出しているのではないかと思えてきました。けれども学者の耳に聞こえてくるのは、雨がトタンを打つ単調な音だけでした。学者がいることのできる場所はリズムの中ではなく、せいぜいその隣なのでした。

ずいぶん長い間、学者はかえるのリズムの横に座っていました。雨は相変わらず激しく降っていました。

隣で欲求をたぎらせている学者のことになんか目もくれず、かえるはヘッドホンをつけたまま、今度は鞆の中から紙の包みと飲み物の水筒を取り出しました。かえるは紙の包みを膝の上で丁寧に開け、がさがさと食べ物を取り出しました。

雨はあいかわらず激しくトタンをたたいていました。かえるは両手に食べものを持っていましたのでさっきのように拳で宙を打つようなことはしませんでした。が、あいかわらず時に激しく、時に緩やかに、追憶の中でリズムを刻み続けていました。時折がさごと食べ物を紙の包みから取り出す音がリズムの中に加わったのが、変化と言えは変化でした。

彼はまた、ときどき食べ物を膝に置き、水筒を両手でぐいと持ち上げて、飲み物を飲むのでした。

雨は相変わらず、激しくトタンをたたいていました。学者はそのまま、しばらく同じようにかえるのリズムを横で眺めていました。彼の音楽に対する好奇心は、強い憧憬に変わっていました。

その時間は永遠に続くかと思われました。が、そうではありませんでした。かえるのリズムが中断される瞬間が現れたのです。

かえるは突然、耳元からヘッドホンを外してベンチの上に置きました。ヘッドホンを外すことは別に驚くようなことではないはずなのですが、学者には衝撃的な出来事に思えました。

かえるが、音楽の中から戻ってきました。

「よく降りますね。」

学者はかえるに話し掛けました。

(ええ。)

というようにかえるはうなずき、雨の中へ目をやりました。

「どちらまで行かれるのですか？」

学者は続けて話し掛けました。かえるは、

(あっち。)

とでもいうかのように、水掻きのある右手で西の方向を指しました。

「そうですね。」

学者は音楽から戻って来たかえるとゆっくり話をしたいと思いました。いえ、自分の話を聞いてもらいたいと思いましたが。ただただ、音楽を聞くように、話を聞いてもらいたいと思ったのです。何を話したものだろう。学者は考えましたが、彼の話せることといったら、王国のことしかないのです。

学者は考えた末、王国の話をしました。

かえるは黙って、雨の跳ねるのをぼんやりと眺めながら、学者の話聞いていました。ヘッドホンは相変わらず、ベンチの上に置かれていました。雨は相変わらず、トタンをたたき続けていました。

どれくらいが過ぎたでしょう。

学者には一瞬、何が起こったのか分かりませんでした。

ぴちゃっと泥水が跳ね上がったかと思うと彼等の前に1台の小型のバスが停車したので

す。

「やっぱりここはバス停だったんですね。」

学者は驚いて呟きました。かえるはうなづく、荷物を抱えて後ろの乗車口からぼんと車内に乗り込みました。すぐにドアが閉まりました。一番後ろの窓からかえるが手を振

っているのが見えました。

あっけにとられている学者を残して、あっという間にバスは行ってしまいました。

バスが学者の前を通り過ぎる時、かえるの水掻きのついた手が西の方角を指しているのがガラス越しに見えたような気がしました。

ベンチの上にはかえるのヘッドホンが残されていました。

かえるが忘れて行ったのです。でも、追いかける手段がありませんでした。

学者は、かえるがしていたようにヘッドホンを耳のところにセットしてみました。

雨の音が聞こえました。雨つぶがバ、バ、バ、バ、とトタンを叩いていました。時に激しく、時に緩やかに。それは学者の追憶の中にある光景をいくつも掘り起こしました。

学者は見えなくなったバスを見つめ、長い間雨の音を聞いていました。とても長い間。やがて雲が破れ、日の光が隙間から降りてくるまで聞いていました。

雨が上がると。それまでの遅れを取り戻すように、学者は西へ向かって歩き始めました。

「王国へ。」

ゆるんだ地面には、いくつもいくつも、大きな水溜まりができていました。

七章 ドラゴンC

かえるのバスを追うように、西へ向かって学者は旅を続けました。こんなにも西へ西へと歩き続けていていいのだろうか、不安に思いながらの旅でした。いつか行き詰まるような気がしました。

学者の心配はやがて形になって現れました。海が見えてきたのです。

「ああ。海だ。」

学者は思わずつぶやきました。

「海」は青い澄んだ水を湛え、はるか遠くまで広がっていました。

一人の少年が、浜辺の大きな岩に腰掛けていました。

こんなところで人に出会えるなんて。よし、あの少年と話をしよう。そしてこれから先の事を考えよう。

学者は思いました。

少年は、とてもつまらなさそうに、海をみつめて座っていました。

「ここに座って話をしてもいい？」

学者は少年に声をかけました。

「いいよ。」

少年は云いましたが、何を話したのか悩みました。こんなふうには少年と二人で、浜辺に腰掛けたことなどなかったからです。

「ここで何をしているの？」

話のトっかかりを作ろうと、学者は尋ねてみました。

「靴を乾かしてるんだ。」

「靴を、乾かしてるのか。」

「うん。」

「ぬれたのかい？」

「うん。」

「それはつめたいだろうね。」

「そうでもないよ。」

「いつまで靴を乾かしてるの？ここで…。」

「靴が乾くまでだよ。」

「早く乾くといいよね。」

「べつにどっちでもいいけど。」

「そうかなあ。」

「そうだよ。」

「…ぬれたのはどっちの靴？」

「両方。」

「…よりたくさんぬれたのは、どっちの靴？」

「右かな。」

「右…か。」

このままでは、つまらない退屈な会話がいつまでも続くような気がしました。けれども、海辺で靴を乾かしている少年と親しくなるには、一体、どんな話をすればいいのでしょうか。

わからないことは率直に尋ねてみるのがいいだろうと学者は思いました。

「どんな話をすればいいだろうね。」

「話？」

「君と、その…仲よくなりたいと思っただらさ。」

「仲よくなりたいの？」

「そうだよ。」

「どうして？」

「どうしてって……仲よくなったほうが、いろんな話ができると思うんだ。」

「変なの。」

確かに変でした。

「仲良くなって、何を話したいの？」

少年は言いました。何を？…学者は思い出しました。

「実は、王国の話をしたいんだ。」

「どこの王国？」

「どこのって……。」

それこそが、彼が少年に聞きたいと思っていたことなのです。

「王国を知らないかい？」

「どんな王国？」

少年がさらに尋ねました。

学者は、少年に王国の話をしました。

学者の口調は淀みなく、的を射、ツボを押さえた明快な話しぶりでした。

思えば誰かに会う度同じ話を何度も何度も繰り返ししてきたのです。

繰り返し話ししていると、自分は王国のことをなんでも知っているように思えてくるのでした。

こんなにもよく知っている王国についていったい何を質問しようとしているのか、分らなくなるのでした

これは、畏でした。

彼には彼の知っていることしか知らないのです。彼の知らないことこそが、今重要なのです。

「ふうん。」

少年は興味深げに最後まで聞いていました。やっと、会話らしい会話になってきたぞと学者は思いましたが、王国のことを知らない少年と話をする理由は何もないように思いました。

少年は右側の靴があらかた乾いてしまったことを確かめてから、ふと、思い付いたように、いいました。

「そういうことはドラゴンに聞けば分かるかもしれない。」
 なかば諦めかけておりましたから、少年のこの答に学者は飛び付きました。

「ドラゴン？」

「しいーっ。」

少年は眉をしかめて言いました。

「眠ってるから。」

「…？」

「気を付けてね。」

「そ、そのドラゴンはどこに？」

「ここにいるじゃないか。」

少年は足元を指差しました。学者は目を凝らして、少年の指差す方向をじっと見詰めました。

「…ドラゴン？」

これまでの会話の流れから考えても分かるように、ドラゴンと思われるものは見当たりませんでした。

学者はもう一度、少年に尋ねました。

「本当に、ドラゴンが、いるの？」

「いないと思うなら、それでいいよ。」

いいわけがありません。学者は、もう一度目を凝らして、じっとその場所をみつめました。心の目や忘れてしまった子供の心とか純粹な気持ちなども動員して見つめました。じっと、じっと、みつめました。落ちている二つの同じような形の石に焦点を合わせて、少しずつ重ね合わせようとしてみたりもしました。

長い、時間が過ぎました。学者は思わず、

「あっ。」

と声を上げそうになりました。

みつめているうちに、おやっと思う瞬間が訪れたのです。目の前に、かすかに「何か」が現れたのです。それはドラゴンである、と断定してしまうには余りにはかなく、かといって違うと言い切ってしまうには少々理不尽な、なんとも不思議な像でした。いってみれば、ドラゴンの気配とでもいうべき、かすかなかすかな「何か」なのでした。もしかしたら、疲れた目がうっかり捕らえた光の虚像であったかも知れませんが、もしかしたら、とにかくドラゴンをみつければ、という気持ちのあせりが生んだ幻覚だったのかも知れません。

どうであれ、彼はこの、彼のとらえたドラゴンを見失ってはならないと思いました。目

の前から消え去ってしまわないうちに、目の前にあるこの稀薄な気配の輪郭を掴まえ、イメージを捕らえ、確固とした存在感を与えなければならぬと思ったのです。

「名前はなんていうの？」

学者は少年に尋ねました。

「ドラゴンC。」

学者は、ポケットから手帳を取り出して、「ドラゴンC」とメモしました。それはどれくらいのレベルのドラゴンなのだろうと、と気になりましたが、そういうことは安易に聞かない方がいいかと思って黙っていました。

「眠ってるんだね。」

学者はいいました。目の前のドラゴンを見ていったのか、それともそれを確かめながら、彼の想像した像に形を与えていこうと思ったのか、彼自身にも分かりませんでした。

「眠ってるよ。」

「いつ…起きるんだろう。」

「靴が乾くまでには起きるんじゃない？」

学者はそこで、少年と二人、靴が乾くのを待つことにしました。

「ドラゴンは、いつから眠ってるの？」

「覚えてない。」

「そんなに永い間？」

「そんなには長くない。一日十時間きっちり眠るんだ。たぶん、もう一、二時間もすれば、起きると思うよ。」

一日十時間。学者は、なんだか困ってしまいました。

「ドラゴンは、夢の中で世界を修理するんだ。」

少年はさらに言いました。

「修理？」

「いろんなものを、たくさん、壊しちゃったからね。」

学者は、ドラゴンがスパナと空気入れを持って奮闘しているところを想像しました。

「夢の中で修理すると、もどどおりになるのかい？」

「なるわけないじゃないか。」

少年は、怒ったように言いました。

「もどどおりにならないなら、修理じゃないじゃないか。」

少年は答えずに、右の靴をぼおんっと、海の向こうへ放り投げました。

「ああ。」
 学者は思わず声を上げました。少年の右の靴は大きな放物線を描いて海の中へ落ちていききました。
 やがて、波に運ばれて浜辺へ寄せられた右の靴を少年は拾って戻り、云いました。
 「すぐに乾くよ。」

この少年はもしかしたらこうやって、繰り返し繰り返し、靴を放り込んで乾かし、放り込んで乾かしているのではないだろうかと学者は思いました。奇妙なドラゴンといい、この少年といい、いったい何のメタファーなのでしょう。学者の好奇心は大きくくすぐられました。

ドラゴンに聞けば分かる。少年はたしかにさっきそう、言いました。

「ドラゴン…Cと…話をするには、どうすればいいんだろう。」

学者は尋ねました。

「話しかければいいんじゃない？」

少年は右の靴を乾かしながら、素っ気なくそう言いました。

「君はドラゴンと親しいの？」

「親しいのかどうか分からないよ。だって、ここには僕とドラゴンしかいないもの。」

「僕を…仲間に入れてくれるわけにはいかないかな。そしたら僕たちは三人組になる。三人組になると、きっといいことがある。」

「いいことって何？」

何でしょう。

「たとえば…多数決ができる。」

「多数決？」

「何かを決めるとき、二人だと喧嘩になるだろう。でも三人だと…」

「喧嘩しないの？」

「するかもしれないけど、どっちが正しいか決められる。」

「どうして？」

「だって、二対一になるだろ。」

「一対一になるかもしれないじゃない。」

「……………」

「いや、それだけじゃない。」

学者は言いました。

「噂話をする事だってできるんだ。」

「……。」

大きな夕日が今にも海の向こうに落ちようとしていました。

「ああ、ドラゴンが目を覚ました。」

少年は言いました。けれども、悲しい哉、学者には、眠っているドラゴンと目を覚ましたドラゴンの気配の違いが分からないのでした。

「目を…覚ましたの？」

「うん。」

少年が言いました。

「××××××××××。」

ドラゴンが何かを言ったようでした。

「何て言ってる？」

「おはようって。」

少年は言いました。

「おはよう。」

学者も云いました。大きな太陽が海に落ちていくところでした。

西の海の果てにある小さな島影のようなものに、太陽は吸い込まれて消えていきました。

「帰るよ。」

少年はすっかり落ちてしまった大きな夕日の方を見て言いました。海は金色に染まり、そこには夕日の気配だけがほんのりと漂っていました。

「え…でも靴が…。」

「ああ、忘れるところだった。」

少年は左右の二つの靴を並べて、言いました。

「ドラゴンC。」

炎の、気配がしました。あっという間に少年の二つの靴から水分が抜けていきました。

学者は混乱しました。最初からこうすればよかつたんじゃないのか。

けれども、これ以上質問を続けるには、学者は疲れ過ぎていました。

少年は乾いた靴を履くと、かかとのところをとんとんとならして言いました。

「帰ろう。ドラゴンC。」

「僕も、一緒に連れて行ってもらえないかな？」

学者は思い切って云ってみました。

「もうすぐ日が暮れる。今日泊まる場所がないんだ。」

その申し出は多数決で可決されました。

学者はその日から、少年とドラゴンCと一緒に暮らし始めたのです。

少年とドラゴンCと学者は毎日浜辺へ行き、その時々に必要なことをしました。それは時には三人が食べるための小魚を釣ることであったり、砂浜に打ち上げられたかもめを葬るための小さな穴を掘ることであったりしました。ドラゴンCはいつも少年と一所にいました。そして一日十時間、きっちり眠ると、

「××××××××（おはよう）」

と言いました。

学者の予想に反して、少年がぬれた靴を乾かすことはもう二度とありませんでした。

「靴を乾かさないのかい？」

「靴なんか乾かさないよ。」

「この間：あんなに乾かしてたじゃないか。それに、あんなに：」

「靴は濡れたときだけ乾かすことにしてるんだ。」

「……。」

「それに、できれば濡らさないようにしてるんだ。」

ここでの生活は、単調ではありましたが、平穏で静かなものでした。故郷を旅立ってか

らずいぶんしばらくぶりに、学者は明日のことを心配せず、昨日のことを後悔せずに毎日を過ごしました。ドラゴンCは毎日せっせと眠り、毎日せっせと世界を修理していました。少年はいつもドラゴンの横で、黙って西の海を見ていました。

気づいたときにはずいぶん長い期間、学者はこの土地で彼等とともに過ごしていました。毎日毎日、ドラゴンCと寝食をともし食べものをわけあって生活しているうちに、少しずつではありますが、学者は確実に、ドラゴンCの気配を捕らえられるようになってきました。ドラゴンCはスパナも空気入れも持っていないようでした。身体はなんだかとでも大きくて、必要なときには立派な翼と綺麗な爪をリズムカルに震わせて、炎を吐いたりしているようでした。不鮮明だった輪郭は、はっきりしてくるどころかおしろいなどん薄くなってついには消えてしまったのですが、ドラゴンCを確認するのにもはや輪郭など必要ないのでした。やがて、学者は、ドラゴンCがどこで何をしているのか、少年に尋ねなくても分かるようになってきました。ドラゴンCの話す言葉の気配から、彼の言いたいこと、いえ、言っていることも分かるようになってきたのです。

天気の良い日の朝には、少年に代わってドラゴンCの立派そうな翼や3本もありそうな首を洗ってやりながら世間話をすることもありました。世間話といっても、厳密には世

間の話ではありませんでした。ドラゴンと話すのはいつも少年の噂話か、お天気のことでした。

「今日はずいぶん寒いけど、明日は雨がふるんだらうか。」

「そんなことわからない。」

「晴れるといいんだけど。」

「昼過ぎには晴れ間が見られると思うよ。」

「どうしてそう思う？」

「なんとなくね。」

「ねえ、ドラゴンC。少年は一体、いつも西の海を見て何を考えているんだらうか？」

「そんなこと分らない。」

「ずいぶんつまらなさそうだと思わないかい？」

「つまらないんじゃない？」

「幸せなんだらうか。」

「幸せなんじゃない？」

「どうしてそう思う？」

「なんとなくね。」

ドラゴンCと話ができるようになってくると、気になることが一つありました。何を聞いても、ドラゴンCの答えは決まっているのです。

「そんなこと分らない。」

「なんとなくね。」

言葉にならない過去を過ぎゆく年月で洗い流してきた男の独り言のようなこの台詞を、けれども学者はすぐ、深く考えずに聞き流せるようになりました。不思議なもので、聞き流せるようになってくればくるほど、ドラゴンCとの間に共有できるものが増えていくような気がしました。時は何も洗い流したりなんかせず、淡々と流れていきました。だから誰も、何も、思い出したりなんかしませんでした。

ですから、それは突然だったのです。

太陽は高く昇り、ドラゴンCが昼寝をはじめようとしていたところでした。

少年はいつものようにドラゴンの隣で西の海を眺めていました。学者は特にすることもなく、浜辺を散歩していました。

気が付くと、学者は海の向こうへ右の靴を放り込んでいました。本当に突然のできごとだったのです。一体何故、そんなことをしてみたのか、学者にもよくわかりませんでした。何かの弾みだったのか、あるいは心の中に起こった何か特別なできごとの結果だったのか……。どちらも違うような気がしました。

ただ単に意味もなく、「そうしてみたかった」だけなのでした。靴は大きく、放物線を描いて波の向こうに落ちました。学者は、じっと、海を見つめていました。

波が、岩に当たっていくつもいくつも砕けて散りました。

やがて幾つ目かの波が、偶然のように学者の靴を運んで戻ってきました。砂の上の靴はたぶたぶと海水に満ちていました。ずっしりと重くなった靴を傾けて、海水を海の中に戻しました。水はまるで生き物のように、海の中へ戻って行きました。学者は溜め息をつきました。

意味もなく濡らした靴を片手に下げていると、意味のない悲しみがふつふつと沸き上がってきました。意味のない悲しみがこんなにも悲しいものだということを、学者はその時、始めて知ったのです。なんだかたまらなくなって、思わずもう片方の靴を脱いで、さっきよりも遠くへ投げてみました。靴はやっぱり同じように大きく風を切って海の中

へ落ちて行きました。靴が波に運ばれて戻って来た時、悲しみはちょうど倍になりました。

もうそれはどうしようもないほどはっきりと無意味な悲しみなのでした。これ以上投げ入れる靴がないことが救いでした。

学者はぼんやりと、しばらくそこへ立っていました。靴は手に、とても重いのでした。いえ、重さは手ではなく、もっと別のところにあるような気がしました。濡れた靴を両手に持っている、ということが、きつと重いのでした。

波が足元まで寄って来ていました。

「乾かさなければ。」

学者はそっとつぶやいてみました。そうです。乾かせばいいのです。学者はぎくぎくと裸足の足で砂を踏みしめ、少年とドラゴンCのところまで戻ってきました。少年が、じつとこっちを見ていました。

「靴を…乾かさうと思ってる。」

「濡れたの？」

「そうなんだ。」

学者はそう言って砂の上へ二つの靴を揃えて並べ、少年の横へ腰掛けました。ドラゴン

Cがふと目を覚まし、ちらっとこっちを向いたような気配がしましたが、すぐにまた夢の中へ戻ってしまったようでした。少年の注意も、すぐにまた西の海へ戻っていきま

太陽は空のてっぺんを少し回ったところから、じりじりと砂浜を焼いていました。真昼の太陽は、学者の靴からも少しずつ、水分を吸い上げていききました。だんだんに色が変わっていく左右の靴を見てみると、なんだか、引いていった潮がまた同じように満ちてくるような満足感が、学者の心にも満ちてきました。

長い時間、二つの靴がすっかり乾いてしまふまで、彼はそこでそうしていました。

「これからはむやみに靴を濡らしたりするのはやめよう。」

学者は思いました。

突然始まった一連の行為は、こうして彼の中で無事に完結したのでした。ここまでの一つの単位であるということがはっきりわかるほどに、それは彼の中できれいに完成されてしまったのです。

少年の横で、彼はしばらくじっと海を見ていました。波の向こうに小さな島影が見えたような気がしました。

「靴を乾かしてたよね。」

学者は少年に言いました。

「うん。」

「君はいつも西の海を見てるね。」

「うん。」

「ドラゴンは夢の中で世界を修理しているんだね。」

「うん。」

「君達は、ずっとここにいろんだね。」

「うん。」

学者はずいぶん、長い間、何かを考えこんでいました。ずいぶん、長い間、考えこんでいました。やがて太陽は西へ西へと傾き、空が茜色に染まり始めました。学者が考えていたことは、とても奇妙なことでした。とても言葉でうまく説明できないようなことでした。ですから、黙っていました。黙っていることで、何か完成するような気がしました。学者は黙って、西の海を見ていました。少年も黙って、西の海を見ていました。ドラゴンCは夢の中で世界を修理していました。だからとても静かでした。

彼はふと、王国のことを思い出しました。

「そうだ。王国へ行かなければ。」
思えばあまりに長い間この場所にとどまっていたのです。もう旅立ってもいいような気がしました。

王国へ行かなければ。学者は思いました。王国へ。
目的ははっきりしているのです。王国へたどりつきさえすれば、何もかもが解決するはずなのでした。

王国へ。学者は自分に言い聞かせるように、呟きました。

「以前話した王国のことを覚えている？」

学者は少年に尋ねました。

「うん。」

少年は答えました。

「もう少し、ドラゴンCが目を覚ますよ。」

「そうだね。」

けれども、なぜだか学者は、ドラゴンCはもう目を覚まさないような気がしました。どうしてなのかは分かりませんでした。それが本当なのかどうかも、分かりませんでした。

どっちもどっちでもいいような気がしました。

「行くよ。」

学者は少年に言いました。

少年は不思議そうに学者を見て、言いました。

「ドラゴンCは眠っているよ。」

「分かるよ。」

学者はいいました。

「ドラゴンCは夢の中で、世界を修理しているんだ。」

「分かるよ。」

太陽は西の海に潜ってしまい、気配だけが辺りを金色に染めていました。

「いろいろありがとう。」

「どうして急に出掛けるの？」

「分からない。」

「分からないのにどうしてそんなに急いでるの？」

「なんとなくね。」

学者は来たときと同じように、荷物を持ち上げ、歩き出しました。砂浜をぎくぎくと歩
きながら、どうしてこんなことになってしまったのだろうか、と考えていました。あの
少年にも、ドラゴンCにも、もう二度と出会うことはないだろうと思っていました。ドラゴ
ンCは、いつ、世界を修理し終わるのだろう、と、それだけが気にかかっていました。

学者は西の海を見ました。遠く西の果てにぼんやりと島影が見えたような気がしました。
今まですっかり忘れていて気付かなかったのです。そこへ行けば、新しい展開があるはず
でした。

「王国へ。」

学者は西の海の島を目指して旅立ちました。

王国

王国

二〇一三年八月三日初版第一刷発行
二〇一四年十二月銃十一日第二版発行

著者 久野那美

発行者 久野那美

nami.sparrow@gmail.com